

10  
春季号  
1959. 4

(火の会)

# 広島駅弁株式会社

広島市松原町

電話④ { 5395番  
6455番

## 目次

|               |                                       |
|---------------|---------------------------------------|
| 表紙            | 棟方志功                                  |
| 文化の位置と民族哲学序説  | 錦田貞雄 二頁                               |
| モスクワの芸術座東京公演  |                                       |
| 「おちつかない老年」を観て | 鈴木直吉 八頁                               |
| 短歌……御婚約を祝す    | 大谷多香子 一〇頁                             |
| 詩……           | 富永昌子 七頁                               |
| 火の矢           | “デイスカツンヨン”<br>“先生と警官”<br>“現代政治形態への疑問” |
| 岩つつじの歌        | 清水文雄 一六頁                              |
| 脆弱の文学         | 中塩正夫 一九頁                              |
| 戊戌遊行吟         | 笹本 毅 二二頁                              |
| 青春の詩人         | — 田中克己 — 美堂正義 二二頁                     |
| 「創作」          |                                       |
| 甘い一つの歌        | 藤本 仁 二四頁                              |

# 青春の詩人

|| 田中克己 ||

## 美堂正義

詩集「西康省」は田中克己氏の第一詩集である。

この道を泣きつつ我の行きしこと

我がわすれなばたれか知るらむ

この和歌が載つてゐる。この和歌は詩集の巻頭を飾るものとして、印象深くいまも私の頭に残つてゐるが、氏の青春の足跡を興味深く、初々しい精神の在り方を受取る事が出来る。詩の最初の作品は公孫樹に寄す

我が家に一本ありて

五月 青々としてその葉茂りたり

嘗つて我が帝國大学生なりし時

その若葉 老いたる教授が金縁眼鏡に映り

我れ退屈しつつ我が青春を誇りしに

いま朝の微風梢より通ひ

燕どもは高らかに歌へども

我れ朝食の膳の乏しきを啣み

妻子と黙し坐して食ふとき

蒼く寂しき木蔭とはなれり

この詩は私が田中克己氏の詩を知る最初の作品である。氏の名を知つたのは第一書房から刊行された「青花」を読んだことに初まる。それから「コギト」の存在を知るやうになり、故人となられた松下武

雄、伊東静雄の両氏を知り、田中克己氏とも親しく会えて、日本浪漫派に属する文学に親しみ、接触を保ちながら戦争の進展に従ひ、遂に私は文学の世界から遠離つてしまった。戦後の空白が永く続き、田中氏の詩集「悲歌」が出版せられたことを知り、これがまた私を文学世界に引き戻すことになり、氏に依つて「果樹園」に加盟することになったが、「果樹園」の二十四号に所載されてゐる

東京 哀歌

髪を包まして遺髪とした散髪屋はなくなった

識つてゐる人は歩いてゐない

古本屋は移転してひっそりとしてゐる

杉浦明平「細胞生活」といふのを買ひ

包ませながら涙が出さうである。

(阿佐ヶ谷)

この詩が私の見た氏が一番最近の作品で、この間が詩人としての活躍の期間である。氏は以後詩を書かないと云つて居られるので、これが最後の作品ではないかと思はれるが、前の「公孫樹」から「東京哀歌」まで、氏の歩ゆまれた跡は続いてゐるが、その間に幾多の作品があるけれども、その中に一編私の頭にいまも残つてゐる詩がある。その詩は角川の昭和文学全集の昭和詩集、筑摩書房の現代日本文学全集の現代詩集の中の田中克己集には入つてゐない詩である。詩集「大陸

遠望」に収められてゐる「Ein Marchen」がそれで、自選集に入つてゐないので氏も重要視して居られないかも知れないが、私には興味を持つてゐるのである。

Ein Marchen

芝生のまんなかに噴泉があった

それに影映して榆の樹があった

そこで或日七人の少女が輪舞を踊つた

踊り疲れて坐らうとしたら椅子が六つしかなかつた。

一人が立たされて泣きさうになつた

空は青く雲は白く風の薫る日だつた

その七人は結婚した 幸せだつた

だけどあの一人だけは早く夫を失つた

そして輪舞の日を憶い出して諦めるのだつた

あの楽しかつた日にも不運だつた自分のことを思ふと

ふしぎと心が鎮まるのだつた。

この詩は実に軟いリズムを持つてゐて、私の心のなかに忍びよつてくる。田中氏の持つ詩のリズムは、物軟くそれでめてサラットして後味の好いのが多いが、特にこの詩にみる美しく軟いリズムは、そんなに沢山は示されてゐないし、その柔軟さは青春の持つ息吹きで満されてゐる。そしてこの詩は氏に笑はれるかも知れないが、青春への訣別の詩ではないかと思はれるからである。この詩に私がひかれるのは、朔太郎や静雄とは違つて自虐精神がなく、水の流れるやうに流れて止まない云はば東洋精神とも云ふべき点に立脚してゐるからである。田中氏の系譜を注視して見るときは、東洋精神と西洋精神の相剋が、近時東洋精神に依つて占められて来てゐる点にある。私達は結局民族に重点を置いて発展させるといふことに観点を持つてゐるから非常に興

味がある。(こう云つたからと云つて極端な排他主義ではないから注意して戴き度いのであるが、少く共我々の時代では西欧の精神には盲目ではあり得ない) だがこの詩は立原道造のあのやさしい詩とも違ふ日本の詩壇では青春の詩人と云へば直に立原道造と云ふけれども、それとは違つてゐる青春の詩人として、私は田中克己氏を尊重してゐる。氏の詩法の特長を示すものは多いが、一字をも無駄がなく、予定された効果を狙つての詩句は、正確をもつてキツチリと整備されてゐる。だから散文に於ても良く成功されることであらう。この詩に示されてゐるのは、私は独逸の農村を思ひ出す。併しこの風景が持つてゐるのは、農村でなくて都会であらう。併もそれが榆の樹のある公園、そんな処が丁度この情景に応はしい場所であるが、農村の明るい榆の木のある美しい風景をそこに置いたら、これもそれに似合つた場所である。けれども氏の精神の中核は、独逸のロマン主義が内在してゐるから、そのやうに私が受取つてゐるのかも知れないが、立原道造の詩は脆くて頼りがいやうに見えて鋭さがあることに特長がある。そしてフランス的な明るさがあることであるが、氏は簡單明瞭で確實に事物の核心を抉る。この相違が二氏の氣質であらうか、詩風にまでも及ぼしてゐる。ともあれ、一つの情景を取上げてくるであらう。

この詩には一つの物語があり、その物語りが美しい情景を持つてゐる。そしてさらりと詩にしてゐる。それがこの様な世界からの訣別となつてゐるところに意味がある。これ以後には、青春らしい詩を見付けられないし、こんな美しい詩を書いてゐる詩人は、現代の日本にはゐないと思つてゐる。

目次

遠雷  
表紙板画……………棟方 志功

火の矢……………2  
良い時代とはなにか・  
保守性といふこと・  
官僚化を排す・

詩……………大木 惇夫…5

詩歌集  
青春の灰燼……………香川 愛美…9  
生と愛と死と……………西木 薫…10  
沙漠の恋歌……………隠岐 国彦…12  
今に思ふ……………竹川 哲生…13  
抒情歌<15首>……………六百田幸夫…14

悲歌に寄す……………美堂 正義…6

日本浪漫派研究 1

「日本浪漫派」批判をめぐる  
若干の考察……………近藤 達夫…16

健康保険医

赤川歯科医院

呉市本通七丁目  
TEL②5279

# 「悲歌」に寄す

美堂 正義

詩を書くといふことは、私には既に詩魔に魅入られた状態で、もうそこから脱け出すことが出来ないらしい。だが私のつらい時に慰さめてくれるのも詩である。そして私は詩と対話を試み、独白するといふ悲しい習癖に馴染んで、永い年月を経て来た。これは詩に進む者の持つ宿命かも知れない。人から見たら下手糞で見るに耐へないやうなもので、自分では万更でもなく、親しみを覚えるのも、我を抑へることが出来なかつただけ、一属強くひかれるのかも知れない。歳月は人も吾も押し流し、世の冷酷に吾が身をすりへらす時に、一冊の詩集が目の前に置かれた。「悲歌」私の当時の暗い生活からはい上らうとする時で、びつたりと私の心を捉へて離さない。あれから幾年、繰返し繰返し読む。枯れた溪川ににじんでくる水に似て、読む度に新らしい未知なものが現はれてくる。田中さんとは昭和十六年十二月七日にお目に掛つてから、それから一度もお会ひする機会を持たない。しかし、その年月さへも忘れる位親密な感情を持つて、昨日お会ひした様に思へるのは、「西康省」「大陸遠望」「悲歌」を読んでゐるからではあるまいか。また私の詩眼が開かれたのは、田中さんにお会ひしてからだと思へば、私の先生とも言ふべき

あゝ私は生きて  
還つて来た！

## 死者は怒るか

息子の戦死の公報のあつた翌朝  
五助さんが榮造さんになつてゐる  
「とかげや蛇を食うたあと  
食い物がなくなつて飢え死にをしたそう  
仏前に食い物をいつぱい供えてやろうと思うが  
怒りはせんぢやろか  
生きてゐるうちに食わせずといてと」  
榮造さんは困つて返答しない  
ぬすみ聞きしてゐた私も困つてしまつた  
死んだあとで人間は怒るだらうか

## 牽牛花

とある家の柵に纏ひついて  
濃い青色に咲いてゐる花の名を小孩們にたづねると  
あどけない唇は開いて「牽牛花」と答へてくれた  
一瞬とめどなく湧き出でたわが郷愁の色の濃さ

## 丘の上

ひとで、私の詩も田中さんといふ土壌の上に開きかけた、一片の花であるかも知れない。現在でもその持つ重要さは変らないばかりか増々重みを加へて来る。この不思議さは何処から来るのであるか。あとがきに依れば昭和二十一年から十年間の選集で、日本の一番暗い時季であつて、著者にとつても一番暗胆として、転々と居を移し、自分の思ひも述べられなかつた。悲哀の詩に包まれてゐるも当然であるが、「当世流行の詩、みな汝と態を異にす」の友人の言にもかはらず、敢然として上梓した決意は、私の想像以上に決意を秘めて居られたに違ひない。慷慨の詩ではなくて、淡々と自分の心境を歌ひ上げるといふ方法が、それだけに水の沁みるやうに心に通つてくる。詩といふものは結局そこへ行きつくのではあるまいかと思つてゐるのを、ここに御手本を示して戴いてゐる。

## 私は生きて

早春の暖い日  
南風の吹く入海に  
私たちを載せた船は着いた  
上陸してしばらく歩く  
頂上まで雑木の茂つたならかな山  
閉め切つた紙障子  
密柑の皮の乾してある縁側  
そんな風景の一つ一つを  
私はたんねんに眺めながら  
思ふことはただひとつ

この丘の上では  
さへぎる木蔭もなく  
遠くの海と島々が見わたされる  
登りみちでおまへの摘んだ青い花は  
おまへの手の中でまだしをれてゐないが  
この晴れた空はいつまでつづくことか  
なにかの蔭がおまへの眼をかすめると  
仰げば一羽の鳥が舞つてゐた

## 少年

物語の中で恋をする  
ジャンとジャンヌのたのしさ  
街の上の方まで灯がともり  
鬼火がふは／＼ただよつてゐる

私の好きな詩は未だ／＼多いが、先づこのやうな詩が眼に止つた。私の趣好にピッタリと合致して、後味の心良さは、近来の日本の詩に見られないものがある。渋味がかつた味ひは、玉露を口の中で味ふやうな思ひがして、芸術の美しさが溢れてゐるやうで、こんな感慨にして呉れる詩が、現在の日本に少ないことを残念に思ふ。「私は生きて」といふ詩に並べられた風景は、田舎の農家のたすまひで、障子それも少し古ぼけた紙となつてゐるもの、密柑の皮が乾してあるぬれ縁、そんな近代的でない昔ながらの誰れでも見られる日本的な姿が、復員の眼に飛び込んで来る。異国で夢の中にさ

え見た密着して生れた日本の國の風物、上陸していくうちにそれらを見て、静かな満ちてくる潮のやうに高まつてくる感情が、ああ私は生きて還つて来た！最後の二行に凝集されてゐる。この見事さは現代までの日本の詩にあつたであらうか。感歎久しくするといふ語は、こんな時に設けられたやうに思つてゐる。「

死者は怒るか」では、「死んだあとで人間は怒るだらうか」といふ最後がなんでもないやうな詩句でありながら、今迄述べて来たのを受け継いで生々としてゐる。この最後に依つてユーモラスがあり明るさがありながらも、自分の胸に還つて来て、悲痛さが一層深くなつてゐる。飢え死んだ息子を偲びながらも、それ故に仏前に食物を一ぱい供へたいのが親心であるし、戦地で死ぬる前に食はせてやりたかつた親心、この奇妙な矛盾は、悲しみを口に出して言つたつて、誰れも同情をして呉れても、真実に魂の奥底は自分一人しか歎くことしか出来ない、それも年老ひた人のみ知る人生の奥が、チラリと覗かせてゐて切なくなるやうである。

「牽牛花」これは応召して中国に居られたときの作である。この短い四行しかない詩に盛られてゐるものは、短い故に貧しいものではなくて、この圧縮されてゐるものは大きいものである。田中さんが私に言はれた言葉のなかに「短い詩を書きなさい。私も短い詩を大学ノートに幾冊も書きました。発表してゐるのは極少部分です。これでしつかり技術をマスターするのです」その言葉はいまも私の耳の奥深くに残つてゐる。あどけない唇に依つて故國に残した子供達のことを思はれて来たのでせう。

「丘の上」平凡な情景を捉へて、このやうな詩が生まれたことは驚きである。青い花と晴れた空、まだしをれてゐない花、いつまで

## 青春の灰燼

香川愛美

金ピカ衣装の小人よ

お前は

何処から来たのかい

霞のかかつたあの

紫の山の向こうから

それとも……

いいえ、そんな事は

どうだつていい

お前は春の女神の

お使いだね

それなのにお前は

どうしてそんな

うつろな目をして

つづく晴れた空、このことは唯単に青い花や晴れた空ではなく、そこに象徴されてゐるものは希望や、その他いろいろのことであろうが、この平靜さに耐へられない心が、一羽の鳥であり、それが示すものは、ゆつくりと空を舞つてゐる。鴉か鳶か鷹か、私は舞つてゐるといふので想像するのですが、そんな鳥であらうか、そのゆたけさに作者の感慨が込められてゐる。その当時の氏に取つては苦しい時代であり、心なくさまざまな一日一日であつたであらう。

「少年」このメルヘンは美しいと思つてゐる。田中さんの詩は平明である。現代詩の難解さは、無理に難解にしてゐる状態である。中味の思想が難解でも、表現の上では少くとも難解であつてはいけないし、このような状態の現代詩の上に、物語的に筋を運ぶといふことも必要で、ここに誰でも解るといふことは、詩の浅さでないといふことを示して居られることに深い尊敬の念を抱いてゐると同時に、歌ひ切つて居られることは、私達後輩の学ぶべき点であると思つてゐる。

ともあれ田中克己氏の評価は、現代詩壇に於ては省られてはゐない。このことは氏の為には残念であるし、日本詩壇の不幸ではあるが、「コギト」の時代も一部の識者だけが認めてゐた事実、現代に於ても一向に変わりはないが、併しそれ故に葬り去られたといふこととでなしに、孤高といふことで言ひ表はされるにふさはしく、常に最高を歩いて居られることを認識し、いつか正しい評価が下されることを信じて疑はない。

私を見るのだい

何をそんなに躊躇う

さあ 早く私の手の上にお乗り

そして凍てついた指に

お前の温い頬を寄せておくれ

私がこんなに頼むのに

お前はそんな小さな

頭を垂れてしまう

じつと佇んだまま

もうこれ以上

私と一緒に

ついて来ては呉れぬのか

△春の小人よ 青春よ▽

バルカノン

14

秋季号

1960.10.

目次

|                           |  |
|---------------------------|--|
| 芸業「飛瀾渦」<br>表紙板画.....棟方 志功 |  |
| 火の矢.....2                 |  |
| 政治と純粋<br>再建の倫理<br>歴史と平和主義 |  |
| 法隆寺.....大木 惇夫.....6       |  |
| 詩歌                        |  |
| 月の色散る.....錦田 貞雄.....24    |  |
| 元安川哀歌.....六百田幸夫.....22    |  |
| 流砂に埋るトーテム.....西木 薫.....20 |  |
| 赤いランプ.....古本 伍.....19     |  |
| 東北紀行                      |  |
| 高村山荘を訪れて.....鈴木 直吉.....10 |  |
| 皇太子を奉迎して.....吉川 豊.....7   |  |
| 詩集・西康省.....美堂 正義.....12   |  |
| たゞき込まれた詩.....大谷多香子.....27 |  |
| 日本浪漫派研究2.....近藤 達夫.....30 |  |

火の會

# 七交商事株式會社

汽罐・諸機械組立据付・  
設計施工  
製罐・配管・保温・保冷  
材料販売

本社 広島市中町二番地  
電話②〇〇〇七・②七五七五番

工場 広島市西観音町一丁目二五番地  
電話③〇四四一番

出張所 益田市中之島松之元  
電話益田一一九八番

## 詩集——西康省

美堂正義

## 序論

私が今迄度々田中克己氏に就て書いて来たが、現在一応心中を整理したいと思ひ立ち、また人からの奨めもあるし、時期的にも一番良い時ではなからうかと考へられるが、この機会を利用して私の思ひを述べて居くのも良いと考へる。

田中克己氏は「コギト」に育つた詩人である。それから「四季」に属して活躍されたことも記憶に残るが、その業績に比して不当に低く評価せられてゐることは、私は非常に残念に思つてゐるし、その正しい評価を下す世評を俟つことは不可能であると思考し、私は私なりの立場から正しい評価を求めたいと思ひながら、貧しくともこの一文に依つて、併せて私の精神の在り方を求め度い。

私は田中氏とは昭和十六年十二月七日、あの大東亜戦争の前日にお会ひして以来、未だにお目に掛る機会を持つてゐない。将来お会ひ出来るかどうか解らないし、それがどんな影響を私に及ぼすかは分らない。併し一つのポイントとして残してゐたいといふことに充分に心が動いてゐる。私よりも氏をより良く知つてゐる人がゐると思ふが、そんなことよりも、氏を評価する上により適当な人が居ようが、居まいが私は私なりに書けばよいことだけであると考へる。

## 西康省に就て

私が「西康省」といふ詩集を手にしたのは、出版されて間もないと記憶する。黒い中に紺の色を秘めた表紙の和綴で、珍らしい装釘の本であつて、漢詩の本であつたら良く似合ふと一瞬思つた程であつた。この氣質は氏の精神の在り方を示すものとして興味深いが、私が氏を知つた始めは、第一書房から刊行されたノーヴァリスの「青い花」の訳本であつて、その受けた感じが全然対照的なのに、戸惑ひを感じてゐたが、その内容は西欧の精神と東洋の精神の合流点にあることが、読む間に了解されて来た。これは奇妙なまで不思議な姿勢を保つてゐる詩集で、現代の文学精神といふものは、伝統を拒否したところから出発し、特に詩に於ては俳句や和歌の持つ精神を否定することから出発してゐる。「詩と詩論」の持つ雰囲気、その前の「麴麴の会」に於ても同様な結果を示してゐる。齊藤茂吉の短歌が初めに文壇及詩壇に於て取り上げられたのは、初期の「赤光」に示された西欧精神が、魅力を持つてゐたことに大部分あるのではあるまいか。成程茂吉の優れた才能は高く評価出来るけれども、その上に異様な精神がなくては、あれ程迄に騒がれなかつたであらう。詩壇に於ても、「四季」「コギト」の持つ日本語の持つ可能性の実験と、伝統への復帰する試みは、戦後に於ては省みること

なしに放棄せられてゐる。このことは「西康省」が出版された時も同様で、「西康省」といふ名が持つ運命はそれを示してゐるかのやうである。「西康省」と云つても、現代の学生にはその名さへ知らない、中国の辺境の省名であつて、現在は四川省と西蔵に分割されて省名はなくなつたが、崑崙山脈の支脈が五指を開いたやうに拡がり、その四辺は青海にも通じてゐる。その省名を詩集に付けたのは、既に浪漫的な姿勢を示して居られる。后年日本浪漫派が結成されたとき、理論的に実践的にその中核を形成したのは、「コギト」の同人達であつた。評論に保田與重郎、中島栄次郎、山岸外史、翻譯に野田又夫、桑原武夫のアランの芸術論集、小説に伊藤佐喜雄、詩に田中克己、伊東静雄、藤原伸二郎の諸氏で、その同人誌は日本の文芸上に大きな足跡を残してゐる。

「詩集西康省」は昭和十三年十月に刊行されたが、初めにこの道を泣きつつ我の行きしこと  
我がわすれなばたれか知るらむ

といふ和歌が載つてゐる。この和歌の持つ意味するものは、あえかな精神に支へられてゐるものは、揺れ動いて止まない不安さであり、若い人の持つ瑞々しさである。この和歌に表現されるものが、田中氏の精神であり、この詩集に一貫して流れてゐる姿である。この浪漫主義は単なる浪漫主義ではなく、日本民族の持つ精神が示されてゐる。これは後年も猶跡を引いて残り、その理性との合致は美事に結実してゐる。第一の詩は

## 公孫樹に寄す

我が家に一本ありて

五月 青々としてその葉茂りたり  
嘗て我が帝国大学生なりし時

その若葉 老いたる教授が金縁眼鏡に映り

我れ退屈しつつ我が青春を誇りしに

いま朝の微風稍より通ひ

燕どもは高らかに歌へども

我れ朝食の膳の乏しきを嘲笑

妻子と黙し坐して食ふとき

蒼く寂しき木蔭とはなれり

樹木の葉も、見る時に依つて受ける感じが違ひ、その年齢に依つても違ふ。流水復た止まらず、人の運命でも同じである。「燕どもは高らかに歌へども」の一句は、最後の「蒼く寂しき木蔭とはなれり」に対応して、私の感歎して止まない技巧に富んでゐる。この詩は整然として、一語の無駄もなく組立てられてゐて、それでゐて乾燥してゐるか云へば湿度があり、この対応されてゐる句で躍動して全章を引締めて余情がある。この馳駆は私の大いに学ばねばならない点で、このやうな如に氏の特長が遺憾なく發揮されてゐる。

## 手紙

けふ僕ははじめて黒龍江を見た

河の水は黒くて早く流れてゐたが

堤では楊柳がもう芽を吹いてゐた

枯蘆だけが生えてゐる河中の三角洲で

(僕が望遠鏡で眺めたとき)

金髪の哨兵が立て銃や捧げ銃や  
立ち射ちの構へをして遊んでゐた  
遠くC市の空に一點黒いは  
偵察機か戦闘機か 急降下したり  
急に上昇したりしてゐるのが見える  
お祭りの前日のやうに華やかな期待はありながら  
何か悲しくて 退屈で——君たちのことも思ひ出す

私は前の詩のやうな情景を好んでゐるが、年齢が寄るに従ひ、こんな詩に引かれるやうになつてきた。特に「手紙」のやうな抑揚の乏しいものは、若い人には魅力のとほしいのではないかと思はれる。その当時としては珍らしい淡白さで、現在に於ても同様である。田中氏の詩の特長は、この様な系統に充分示されてゐて、後になつてもしばしば見られる。

お祭りの前日のやうに華やかな期待はありながら  
何か悲しくて、退屈で——君たちのことも思ひ出す  
この最後の二句に盛られてゐる感情は、沈静な書き方でありながら、その巧な終末は美しい心の動きを画き出してゐる。

## 秋の湖

僕たちは秋の半日を一緒に暮した  
下り列車の三等席のきまりとて  
膝つきあはせて親密に語つた  
「北支は今も寒いことでせうね  
私は筑波の北の麓の生れ

それからの生活が頭の中を去らない。この情景は良くこの詩に表現されてゐる。ここには戦争の肯定も否定もないが、庶民としての生きてゐる姿が浮び、それが浮彫されてゐる。

このことは恒に作者は現実を正しく認識するといふことであらう。あるがまゝに物象を捉え、而もそれを自分の心に一旦沈めて、自己のものにして打出すことは、容易のやうでなかなかむづかしいけれども、それが出来ることは普通ではないのである。庶民の心を捉えて親しむことを氏の本質であると思ふ。このことは保田氏が民草と云ふことを、しばしば云つてゐられるが、それに一致してゐると思ふ。

## 佛蘭西にゐる友に

君の送つてくれたアルプスの絵葉書では  
山々も湖もこの上なく美しかったが  
僕は君たちがひどい目で見られないかと心配してゐる  
君と見た友田恭助は一週間前に討死し  
僕らの先輩で眼の妻かつたSも  
装甲列車上で前頭部を打抜かれた  
ああ ああ ああ ああ  
邯鄲 娘子関 禹城 殺虎口  
毎日毎日が色彩多く お察し通り多忙に明け暮れしてゐる  
雲崗の石仏もわが日の丸で保護されてゐるし小学生たちも作文してゐる

——強い正しい日本の兵隊さん  
そして訣れ際には生れたばかりだった

家には五人の子供があります  
村人たちは旗立てて送つてくれました  
東京には十日間とまつてゐました  
あの畑に白い蕎麦の花でせうか  
なんと唐辛子が沢山植わつてますね  
ここらは私のくによりずつと豊かなことすね  
汽車は轟々と鉄路を走り  
ひるすぎて一条の鉄橋を渡る

秋の遠江の浜名の湖  
日は戻り 船は帰る引佐の細江  
山々はしづかに湖に影映し——  
兵士はじつと眼をすゑて眺め  
樂しげに云ひ出して僕を涙ぐます  
「いくさのおかげで珍らしいところを見ました」

この詩の中に会話が挿入されてゐるが、会話といふものは、詩の中に使用して成功するといふのは少ない。田中氏の詩にはこの他にもあるが、心にくい迄の巧みに使用されてゐる。そして詩が一段と高められてゐる。「ここらは私のくによりずつと豊かなことすね」から後の方の風景、「いくさのおかげで珍らしいところを見ました」が生かされ、その言葉は兵士の困苦も過ぎてしまへば、霞の中に模糊としてほかされ、戦地のこともいまはもう過去として過ぎてしまつて、自分の家族と土地のことが頭の中を占めて、戦争があつたために珍らしい土地も見られたといふ感慨がある。戦争もまだ日本の国内に直に及んでゐない時では、生きて還つて来た喜びと、

僕の峻も這ひ廻るやうになつて——  
あつ インクの瓶をひっくり覆した

## 俺は悪魔——

俺は悪魔を呼んだら 悪魔はやつて来た  
顔色のわるい瘦せた 眼尻に皺のある  
気の弱さうな男なのに一寸驚かされた  
俺を見るとお辞儀をして世間並の挨拶をし  
俺の研究が旨く行つてるかどうかを訊ね  
自分も近頃マルキシズムを卒業して  
神皇正統記と古史徵開題記を読んでゐる——  
理由は外でもない テキストが安いからだ  
小説や詩はつまらぬから君も読むなと忠告した  
俺はじつと見つめて 此の男が  
以前 大学で煽動演説をやつて  
警官に逮捕された男なのを知つた  
彼はこの時、最も悪魔的な方法で  
そこを逃げ出したので一時有名だった——

## 鳶

俺はとぶ  
日はすでに傾き風が強い  
感情が昂ぶつて孤が旨く画けない  
冷い虚空で  
俺はひとり言をいひ



涙を流して——  
獲物にまつすぐに墜ちかかる

私はこの三編中、前の二編は同一傾向で、最後の二編とは趣きを殊にしてゐる。氏の詩の特長とするのは、知的に組立てられた抒情は、在来に存在してゐたものとは一変して、即物的に捉えるといふ点が特に相異してゐる。それは物語的に表現することもあるといふ徴の場合もある。また敘事詩の場合もある。それぞれ違つた詩ではありながら、貫いてゐる詩の世界は、前に述べた点にある。「四季」や「ヨギト」以前の抒情詩とは全然別個の面を持つていて音楽性を固守したり、感情の推移に押し流されたりしないで、一層複雑な心理的な要素を加え、知性で制御するといふ方向に展開したために、昭和期の抒情詩の花を開いたのである。これは「詩と詩論」や「プロレタリア詩」にあきたらなくなつて、行きづまつた文学理念の展開の時期であり、その新しい方向に、決定的な役割を果した新詩の、一翼を担つたばかりでなく、昭和初期の文芸史上に大きな足跡を残したのであるが、新しい抒情詩の魅力の前には、在来の詩は影を失つたといふ方が、一層適切な言ひ方であらう。それが戦後になつて、戦争責任といふ合言葉に依つて叩き、そんな觀念的な利己的な行動が、必然的に現代の混乱を導いたとも云へる。それは劣等感が反逆の姿勢を取らしたのか、叩くことに依つて自己の立場を有利に擁護出来ると信じたか、叩くことに依つて自己の立場を有利に擁護出来ると信じたか、又文壇に自分の地歩を固めることが出来るといふ確信が、このやうな行為を生んだのだ、現在に於ては見捨てられたやうなことを、今でも尚叫んでゐる人がある。その人達に依つて今の行つまりを招来したのである。

あらう。また心の動きであらうか。「涙を流して——」で一呼吸して、「獲物にまつすぐに墜ちかかる」は心理的な動きであらう。

「詩集西康省」は田中克己氏の処女詩集であり、世上多く言はれてゐることは、その人の運命は処女作に依つて決定すると、この詩集を読んでゐるうちに思ふのは、この詩集にあるものが、やはり後年に於ても尾を引いてゐることである。私に話されたことを思ひ出すのだが、「僕は散文も書けますが、併し美堂さんは書けませんよ。やはりその人の持つてゐることで仕方ありません。」このことは氏には散文を書く能力があると、自信を持つてゐられたことであらう。それを裏書きするやうに、次々と発表されたけれども、それは正確な文章で、評判が良く友人の認めるところである。私の友人も無駄がないと感嘆してゐたが、その能力は、詩の上に於ても良く生かされてゐる。他の詩人に比して息の永いことである。それ故にその点が詩の伝統より少し離れてゐるやうに、一般人からは見えるのではないか。そうとしたら、日本に於ける詩の不幸とか、または正しい詩を見失つてゐるといふ点を、私は問題にしなければならぬ。

## 朝

世界中に鐘が鳴りわたる

リンリンリリエンクロオオン——

葛のからんだ塔よ 朝日のあたる石段よ

誰かが通りに手帛を落して行つて

この鐘の音の凝音は美しい。青い空に響き渡る鐘の音。教会の軽げな音である。その音が何処までも響き渡つていくやうである。町

田中氏の詩は他の人の如くもはやされはしなかつたけれども、影響は決して負けてはゐなかつたと思はれる。併しそのグループの人達の中では、最も知的な詩を書かれたことは、改めて現在に於て評価をし直す必要があるのではないかと考へられる。氏の多くの詩が物語的に構成されてゐることは、現代詩の難解が指摘されてゐるが、その反対に分り易い詩が殆んどで、誰れにでも理解されるといふ利点があり、それでめて浅薄さの無いことは、非凡でなければ出来ないことである。

「佛蘭西にゐる友に」は友のことを心配し、日本の状況を知らせ、自分の子供のことも云ひそへた、内容は平凡ではあるけれども、「毎日毎日が色彩多く……」とか、また友田恭助の戦死の事等のははすらすらと書かれてゐるが、僕の峻もから最後のインク瓶をひつくり覆したといふことで、この詩が生かされてゐる。田中氏の詩の締めくくりは美事であると思ふ。このやうななんでもなく最後の句を持つてくるのは、なかなか出来難いことである。「俺は悪魔を——」では、氏は不正や悪徳を悪く居られることを知る。このことは純一な性情が、不純を拒否することが強く、一本の筋金に通つてゐる。この感情は本ものとそうでないものを臭ぎ分ける。氏のやうに好悪の激しい人は少なく、そして常に注意深くより分ける。美醜をはつきり見定めることにもなる。この詩に盛られてゐるものは、平常私達の聞知してゐることであつて、戯画的に書き出して居られるのは、面白いしそれだけではなく、物語的に筋運びながらも、曇みかけながらも、構成は散文的な手法でまともに居られる。「鳶」は心理的な作品で、今迄の詩よりも漸々違つてゐるし、短い詩であるが、「感情が昂ぶつて孤が旨く画けない」は氏の姿で

であらう。都会、それも大きな都会ではなくて、中欧のある町を想像すればよい。近くに山があり、谷がある処かも知れぬ。それらに清く澄んだ空を渡つていく、清澄な空気をふるはしながら、牧場には馬や牛が長閑に遊んでゐる景色がある。肌には冷たい朝の大きに突立つてゐる塔、朝日が昇り始める。塔からんだ葛も浮き上つてくる。時は五月であらうか。しばらくすると石段にも日が照り始める。人気がない通りに落ちた手帛の、白いのが鮮やかに目に沁みる。

## 歌 唱

彼等が口をあけて歌ふとき

その口腔はうす紅い

——それを俺は永い間愛して来たものだ

芳ばしい微風が薄い雲をひく

その奥で歌だけがいつまでも残る

世界はその方がもつと美しく

「その奥で歌だけがいつまでも残る、世界はその方がもつと美しい」とは巧な技法の冴えがある。愛することでも変つていく、しかし、段々表面のことよりも、奥深くかくされてゐるものに興味を引く、表面の華やかさよりも、いふし銀のやうに光る内臓してゐるものに、曳かれるのをどうしようもなくなつてくる。この時に真実の姿を見せるのだが、ともすれば、その時人々はあまりの深さに理解をすることが出来なくなることがある。このことを独善と云つて排斥するが、排斥する者の理解の低さを露呈してゐる。また大多数の

人に取つては、そんなことはどうでもよいようになる。後になつて人は驚いて、その高さを感歎するけれども、作者はそんなことはどうでもよくなつてしまふ。芸術とはそんなものである。ほかに、言ひ表すことの出来ないもので、そのことが何時も問題となり、その為いろいろな議論が闘はされるが、満足をさすような結論が出たためがない。そんなむづかしいものであるとは、理解してゐながらも、そのために如何に芸術家が苦しんで生きたか、見捨てられて陋巷に悶死した者もあるが、それでゐて離れられない悪縁が深く、その不思議さに驚くことがある。そんな思ひを浮はせる詩である。若々しい、如何にも青春を象徴させる詩であるが、「芳ばしい微笑が——はとりわけて美しい。

### かはせみ

谿に白いはあれば百合  
田舎ゆえあのやうなボンネをかぶるひとはない  
蝸は啼く 高い梢で 燃え残りの雲の中で 谿で水をつかふ音がする

この詩は三好達治氏の四行詩を思はせるやうである。その用語も似てゐるが、ましてその奇智に至つては、「雲雀」の詩を思ひ浮はせるやうである。独逸文学に親しむ作者が、佛蘭西文学の伝統とも云ふべきものを撰取して、それを自己棄籠のものとして居られるのは、常人の及ばない処である。谿で水をつかふ音がする。かはせみがしてゐるのだが、高い梢で燃え残りの雲の中といふ曇み込んだ用語、夕日の残映がまだ梢や雲の中に残つて、「田舎ゆえあのやう

中では少女たちが眠つている  
詰め綿や白い花などを  
血の柘榴石が象眼して

### 春 旅

紙ナプキンに花びらが散り  
ナイフの刃には熾々たる山脈が映つて  
蝶がこの食堂車に舞ひこんで来た

### 颯

烈しい風の中で  
彼等はパンパンと空気銃をうつついた  
鳥たちは撃たれたやうな恰好で  
枯野に墜ちて逃げてしまふ  
烈しい風の中で

パンパン銃声がつづいていた  
この様な短い詩に就ては、氏は「短い詩を書いては詩の練習をしたものです。大学ノートに幾冊も書いてゐますが、発表するのはほんの一部です。併しこれが非常に役立つてゐますが、短い詩は書き悪いものです。併し非常に役立ちます。」と、そんな話を私は思ひ出してゐる。このことは短い言葉で、最大の表現をしようとする努力、予約された美しさ、言葉の微妙な感覚を会得出来るからである。

なボンネをかぶるひとはない」といふ詩も気のきいた用法で、この短詩のよさは、不用や又効果のない語句は全部といつていゝ程削除されてゐる。例へば現在の詩壇に於ては、殊更に心理的な面を言葉で述べようとして、複雑と混乱をしてゐることは、詩を面白くないものにしてゐる。この点日本の在来の詩形のものには、極度に象徴されてゐて、軟かい言葉を使用して、一を言つて十を知らずといふ表現方法に依つてゐる。その点もう一度省る点に到達してゐる。日本の現代詩が日本の在来の精神を否定するといふことから出発してゐる。このことは既にして民族の精神をも否定せんとする姿勢を保つてゐるとも云へることで、それ故に日本の文化に定着する速度が遅い。併し一度西欧に眼を向けたならば、短詩といふものに、日本の俳句の精神が取り入れられてゐる。それなのに吾が日本に於ては、そのことすらも見捨てられてゐる事実は、戦前と戦後の断層が大きく口を開いて、総て日本の姿の崩壊を指摘したとは云へ、その誤りは大きいと言はねばならないだらう。それ故に現代詩の表現方法の不足が目立ち、日本語の理解の貧困と相俟つて、日本に於ける詩の発展を阻害してゐる。特にその語彙の貧弱さに至つては、致命的な欠陥となつてゐる。

### 象 眼

黒檀の画の外側に  
寶石たちは窮屈におしこめられている

### 赤いランプ

古 本 伍

にごった紫色の情愛が、どこかの女の、オレンジ色の  
プライドと、鼻の先でぶつつかつて、黒赤色に、あつ、  
という間にこんがらがっていった。

貧乏のくせに、よけいな情愛なんか出すもんだから、  
ますます、ネチックク、くいこむ。

泥沼を、ズルッ、ペチャツ、ズルッ、ペチャツ、と、  
歩くような朝

お前は海浜に座っていた。そして、お前は、男のくせ  
に、長いスカートをはいていたが、そこに、赤いラン  
プが、チカチカ点滅して、漁火が波にゆれ動くように  
みえた。

時間が、トブン、と海の底へ落ちた。

(三五、六、一五)

目次

|                                       |  |
|---------------------------------------|--|
| 麦 花<br>表紙板画.....棟方 志功                 |  |
| 火 の 矢.....2                           |  |
| 政治と姿勢<br>自由・殺人<br>平和な教育の為に<br>現代思想の断面 |  |
| 「秋の湖」について.....田中 克己.....6             |  |
| 蟬との距離.....末長 護.....8                  |  |
| 偶 感.....美堂 正義.....10                  |  |
| 真冬の夢.....愛 美.....11                   |  |
| 秋讃歌ほか.....六百田幸夫.....12                |  |
| 日本浪漫派研究3.....近藤 達夫.....14             |  |

千数百年來漢文音讀によつて伝えられた  
不朽の經典の日本語版！初めて流麗な現  
代語に完成！

大木 惇 夫 訳

『和譯六時禮讚頒布』

大本山増上寺藏版

上製版（寺院用）

装幀ドンス・特スキ最上質紙・函入り・教  
科書字体二百余ページ  
頒価四八〇円 送料四〇円

普及版（在家用）

装幀クロス・特スキ上質紙・教科書字体二  
百余ページ  
頒価二八〇円 送料四〇円

広島市紙屋町永和KK内

発行所  
発売元

和譯六時禮讚刊行會

代 表 岩 田 幸 雄  
西部連絡所 ② 五九一六

# 『秋の湖』について

田中克己

バルカノンに美堂さんが毎号わたしの拙い詩のことを書いて下さつてゐる。わたしはそれを開いて見るたびに、ゐたたまれぬほど恥かしい思ひがする。果樹園といふわたしどものやつてゐる雑誌に、小高根二郎氏が書く伊東静雄論は、さらにくはしくてもう五十回に近くなる。これも伊東が生きてゐたら、わたし同様に恐縮して恥かしかることだらうと思ふ。

美堂さんにはそんなわけで、ありがたくも恥かしくもありとの気持は申し上げてゐるが、先号のところでは、「秋の湖」といふ詩の御解説でちよつと事実とちがふところを気づいたので、そのことも申し上げた。それをもすこしくはしく申し上げてみたいと思ふ。

美堂さんの思ひちがひされたのは、もとよりわたしの詩の拙さからもあるが、一つには戦争とか出征兵士とかへの、わたしの今となつては理解しにくい感情がこめられてゐるこの詩の性質が、今のうちに（わたしが生きて、もののいへるうちに）解説しておかねばと思ふからである。

美堂さんは「秋の湖」の詩に出て来る兵士を「戦地のこともいまはもう過去として過ぎてしまつた人」「凱旋兵士といつておいでであるが、実はこれはいまから戦地へゆくひとなのである。さうしてわたしの考へでは、二度とかへつて来ないひとなのである。この詩の作はわたしの日記を見ると、昭和十二年十一月十二日のことで、その前日には「登校して富樫弘三氏の戦死をきく。氏は浪速中学校（当時のわたしの勤先）剣道講師、剣道六段、性極め

て温厚なりし。他は交薄きゆゑ知らず。午後（同氏の大阪市）松屋町宅を弔問す。老母・少女あり」としるしてゐる。

昭和十二年は日支事変勃発の年で、この前後に北京はもとより、十年後わたしが兵士としてゆくことになつた保定や石家荘、正定などの地方も日本軍の占領するところとなつた。わたしはもとよりそんなことも予想してゐずただ同僚の戦死で、またその遺族の様子を見て大いに感動し、これに先だち十月二十日東京、二十六日帰郷の時、東海道線にのりあはせた兵隊のことがばをかりて哀悼の意を表してゐるのである。あの百姓兵隊は生れてはじめて見る遠江の田畑に感心してゐた。その朴訥さがわたしをたいへんおどろかした。しかもわたしの日記によれば「家に子ども五人を置いて来た。責任の重大なことをおもふ」とわけのわからぬことばをいひ、「戦争が早くすめばよいですなえ」といつてわたしを驚かせたといふ。事変といふ名の戦争がはじまつてまだ三ヶ月であるが、この百姓兵隊の聡明なことよ。わたしはいまとなつてははぢるのみである。

はじめからわたしが恥かしかつてゐることを強調したが、詩のつたないのみならず、こんな点でわたしも久しぶりに恥かしさの記憶を新にし得た。戦争のその後のことは、また改めて考へる機会もあるかと思ふ。わたしに詩を書かした二人の軍人（富樫さんはたぶん将校だつたと思ふ）のことを説明しておくにとゞめよう。機会を与へて下さつたバルカノンの編輯の方々ならびに美堂氏に深くお礼を申し上げます。

# 赤川齒科医院

TEL ② 5279  
呉市本通七丁目

## バルカノン

17  
冬季号  
1962.2

### 目次

|               |            |
|---------------|------------|
| 梅             |            |
| 表紙板画          | 棟方 志功      |
| 火の矢           | 2          |
| 僕らは何によって生きるのか |            |
| リバイバル         |            |
| あゝ講堂館柔道       |            |
| 短歌            | 三宅 万造…6    |
|               | 西村 公晴…14   |
| ふるさとの山        | 大谷多香子…12   |
| 大陸遠望序説        | 美堂 正義…7    |
| 日本浪漫派研究       | 5 近藤 達夫…15 |

## 火の会

のくらしから生れ出たものであることを知つてゐる。くらしの変らない限り道徳は変らな

が国本有の、

そして、リバイバル・ブームの現象を、時に、今の世相や民心とつなぎ合わせて、宛か

その池田首相は曾ての物言はず時代、多量人は麦飯を食えといつたという、例の放言が

の立ち技偏重であり、且つその優勝者達がそ  
るって巨漢であったことである。

たしかに古来の柔術を柔道に昇華せしめた  
のは、創始者加納治五郎翁の天才と見識であ  
った。ひとつの技術を遂に道までに止揚する  
ことは古来からわが

國の偉大な兵法者の  
宿命であった。精妙  
な流派をのみ出した  
天才が、その後継者  
を発見するや野山に  
随通してその最後の  
不分明なことも珍ら  
しいことではないの  
だ。道の極まること  
る武技もすでに空し  
かつたのであらうか  
たゞこの近代の兵法  
者はヨーロッパの合  
理的精神を持つてあ  
たので、柔道の国際化を志したのである。そ  
れはやがて後継の血流によって「道」よりも  
「スポーツ」に傾いた。

けだし柔道はその精神においてすでにヨー  
ロッパのものとなつてゐたのである。国際化

によつて固有の思想を失ふことは速く吉田神  
道のわが神の道からの脱落を説くまでもある  
まい。近くは戦後の国字国語運動もこれと同  
じ系列の発想方法である。国際化或ひは近代  
化といふことは何らかの形で己の魂を売らな  
なかつたやうに、柔道のスポーツ化は避ける  
ことの出来ないもの  
だ。今更柔道以前の  
柔術にかへつて一撃  
必殺の武技をもつて  
闘ふといふが如きは  
すでにナンセンスで  
ある。たゞ明治の講  
道館の四天王達は当  
時の柔術家に勝つた  
といふことに注目し  
なければなるまい。柔  
術に対する柔道の勝  
利が全国に普及する  
原動力となつたので  
ある。

### 三宅萬造

倉敷郊外羽島ヶ丘天神堂に支那古陶器研究の大家陶匠岡本欣三氏を訪ねて

肝を病む大人を見舞へば病む人と思へざりけり鏡目の光りは  
千三百度ぎりぎりにして生み成せるこれの陶器の色の深さよ  
今は亡き小林画伯つけし絵の皿に見入りて声のみにけり  
いたゞきし灰かぶり急須のにぶき色支那の古陶に似しはうれしも  
灰かぶりふたのよこれが何んとなく我に親しも浪々の身は

い限り成立しない考へ方なのである。

今日A・A諸国家群の急速な近代化も、こ  
の様な犠牲の上に行はれていくのである。そ  
の様なA・A諸国の指導者を見て感心する者  
らは、その前に百年前のわれらが維新の先覚

思へば日本選手の敗北によつて講道館柔道  
はその国際化をひとまず完成したのである。  
そして内外人士の一部は講道館柔道に対する  
興味を半ば失つたのである。

## 大陸遠望序説

### 美堂正義

私は音楽は素人であるから、楽器のこともよく知らないが、ピア  
ノやヴァイオリン等は主な楽器である。併しフルートは脇役といふ  
位置であるらしい。室内楽や協奏曲等に於てもフルートの位置は与  
へられてゐないし、概して管楽器の運命といふものは、打楽器より  
もなほ低い位置に甘んじてゐる。「アラン」はドラムといふものは、  
それが打たれるまでは誰れからも省られぬが、一度それが打ち鳴  
らされるや主役となるといふやうな意味を、「情熱に關する八十一  
章」のなかだつたと思ふが、読んだ記憶がある。フルートは誰れか  
らも問題にされてゐないけれども、それでゐてあの澄んだ音色は捨  
て切ることができない。あの音は娼婦として人の魂を攫つていつて  
しまふ。ヴァイオリンの音とは違つた音色は、より純粹で、谷間の  
岩の間を縫つて流れる音のやうに、郷愁の想ひにさそひ込んでしま  
ふ。各楽器もそれぞれの運命があるやうに、人にもそれぞれの運命  
があるのかも知れないが、楽器は永遠の定めがある。けれども、人  
は時代に依つて評価が異つてくる場合があるし、また後世に至つて  
輝きを増すこともある。私の前置きが長くなつたけれども、田中氏

の詩を読んでみると、フルートの音を聴いてゐる心持がする。この  
楽器の持味と、田中氏の詩の持味が似通つてゐる。このことは理論  
的といふよりも、直感的な感じを私は述べるので、この直感的な感  
動が先づ作品の嗜好を決定し、それから理論的に説明していく段階  
となる。私もその過程を辿りながら、手探りのうちに己れ自身を捉  
みたいと思つてゐる。

「日本の新詩は、著者の詩に於て、初めて真の確立を見たといふも  
あへて過言ではあるまい。著者の詩は、折にふれて、極めてさりげ  
なくうたひあげられてゐる。その清潔な詩の姿こそ、その裡に幾重  
のあらはな抒情への羞らひと拒否とがつまみかくされてゐること  
であらうか。そこに人々は、東洋の詩の姿を、日本の深い叡智のうた  
を見出すことが出来るであらう。この「大陸遠望」は著者の「詩集  
西康省」につぐ第二詩集であり、昭和十三年以後の詩およそ五十編  
を集めて一巻とした。作詩の年月に於てさきの「詩集西康省」に近  
接するものではあるが、その詩境にはおのづから相異なるものが見  
られるであらう。」また

「高邁の志気、冷徹の睿智、俊銳の癖性、此処に純粹現代に類を絶する著者の清冽なる詩精神が凝って万顆の珠玉となった。著者の激しき抒情は限りなき有差の陰影に屈折して高貴清新の典型を創始した。現代詩を語らんとする者は先づ此の孤高の精神の激しき傾斜を測定せよ。」

以上の短い二文は「大陸遠望」の詩集の帯紙に印刷されてある推薦文である。この文に示されてある著者の詩風は、よく著者の風格を伝へて余す処がない程である。

「詩集西康省」は昭和十二年十月一日発行となつてゐて、あとがきもなく、序歌と詩とだけであつさりしてゐる。推薦者もない詩集は類が少なく、私の知つてゐる詩集では知らないことである。それに第一詩集であればなほ更で、「大陸遠望」は昭和十五年九月十七日発行である。今度は蓮田善明氏に捧ぐることが附いてゐる。

これはわたしの第二詩集で「詩集西康省」につぐものである。わたしはこの拙きを支なる蓮田善明氏にさげようと思ふ。それはかういふわけからである。蓮田氏はわたしに「西康省」を出したと恰も時を同じうして昭和十三年の十月に応召された。これにも何かの因縁があるやうに思ふ。応召後、しばらく氏は故郷の聯隊に居られた。大陸に出動の命を受けられたのが翌年の三月だつたか。この時、氏はコギトの発行所に速達でわたしの詩集を求められた。わたしはこれを伝へ聞いたとき大変感激した。あの拙い詩集には先輩や知人のありがたい激励が多かつたが、そのどれよりもまして、戦地に渡る前日のますらをがわたしの詩集のことを念頭にかけてゐられたといふこのことが嬉しかった。

そのうへ七月にはわたしは戦地の同氏から便りをいたゞいた。それにはかういふ二篇の詩が入つてゐた。

#### 草

出征の日に、あなたの詩は、  
遠征の彼方から私を呼んだ。  
わたしはあなたの詩集を何処に置かうかと携へて来ただけ。

わたしは探険家が、その太古秘匿されたるたからを、  
奇しい絵画そこに開きて索すやうに、  
あなたの詩集を戦のにはで繕く。

ここで私はただ石を見た。

石の上には草が風に吹かれてゐた。

わたしはその処処で草を摘み、あなたの詩集にそつと挿んだ。

#### 押花

友の美しい詩集に、わたしは  
時々、所々で摘みとつた草や花を挿んだ。

(ああ、こんな時、こんな所々！)

日経て、詩集を開く時、それら草花  
其儘に押し花となりて、ひつたりと  
やさしい姿を、眠つたまゝ残してゐた。

もはやあのやはらかさは無く潤れて

悲しい一つの形になり果てゝはあだが、  
残し得た花の、草の見事さ。

その一つの花を、わたしは或る日見めて、破れぬやうにそつと指もて剝がして見たるに、

花に添へる葉の裏にも隠れて又花がしつかりとついでゐた。

蓮田氏はまた文芸文化誌上でも古今集などと共にわたしの拙い詩集が陣中の慰めとなつてゐる由をいつてをられた。蓮田氏の居られる戦線は全く膠着状態となつてゐて、敵味方が近距離で睨みあつたまゝ、対峙してゐる。絶えざる緊張が要求せられる箇所である。岩山の横穴の入口に席を吊してその奥に交代で寝るだけで、夜昼を分たぬ見張りについてをられるとも聞いた。気まぐれやおどかしに支那兵の撃つ弾丸が何時でも飛んで来ると聞いた。果して蓮田氏が手に戦傷を負つて一時後送されたのはこの年の終り近くであつた。わたしはそれを聞いて身のみきしまる思ひがした。

心弱いわたしにはもちろん苦いことばよりも甘いことばの方がいい。しかしわたしにはまた同時にたとへ先輩知友のことばとてすなほに受取れぬひがみ心があり、また喜びを素直にあらはせぬ知羞の情がある。しかし日々を生死の境においてゐられる蓮田氏のことばだけはそのわたしにも素直に戴くことが出来た。従つてこれ以後わたしの作品は氏に向けて書きつゞけられた。それが氏の応召後一年有余でこんなに溜つてしまつたのである。

この詩集もまた蓮田氏によつて摘まれる大陸の美しい花々を挿む

ことが出来ればと切に思ふ。

昭和十五年六月下迄

田中克巳

私が「捧ぐることば」を全文書いたのは、「大陸遠望」形成の一端を説明するためであり、また、蓮田氏とのつながりが如何に深いものであるかを述べたからである。またその中の蓮田氏の二つの詩が書いてあることは、蓮田氏の詩を読む機会の無かつた私には珍らしく、深い感慨と共に蓮田氏の運命を考へさせられることである。私は「果樹園」の小高根二郎氏の著作「作品と書簡から見た伊東静雄」「蓮田善明とその死」に続く一聯の、蓮田氏の姿を、この田中氏の一文に依つて正しく私の心に定着させてくれる。このことは単にそれだけに止まるものではなく、二人の心の底流に相互ひに相触るものがなくてはかなはぬことである。その精神の交流ともなるものは何んであるかは、私にはうかがひ知ることには出来ないが、僅に知ることの出来る範囲内で推察するのは、二人の立つ土壌が日本の文芸文化の上に同じくしたといふことで、日本民族の持つ浪漫的精神を信じ、民族の伝統と血脈が、二人の血に同時に流れてゐたといふことに外ならないし、私もそのことを信じてゐる。ニユアンスの相異は多少あつたであらうが、その大道は互の上に大きく開けてゐて、その精神の在り方にも互に影響を及ぼした点があるのではあるまいか。さもなくば終戦の時の蓮田氏の死は無意味となるし、現在の田中氏の微塵もゆるがない精神の在り方があるまいと思へるからである。

「コギト」百号（昭和十五年十月号）に田中氏は詩集「大陸遠望

「覚書を書いて居られる。」「題名はこの詩集をいま大陸にある運田善明氏に捧げたと同じ理由による。事実この数年間、私の作詩の刺激となったのは大陸であった。私はそれを遠望しながら詩を作った。そして恐らくこの数年は私の生涯で一番詩の多く出来た浪漫的な時代であったといふことになるだらう。」「この文中の恐らく以後に注意すれば、第一詩集の「詩集西康省」の名も亦了解出来るのではないかと思はれる。これは氏が東大の東洋史を専攻されたことにも起因し、恒に大陸に向けられた眼は自分の心の故郷に對し変らぬあこがれといったやうなものを抱いて居られ、これが氏の精神を育んだことに大いに關係がある。私の僭越な想像を以て思惟してみるのである。これは「楊貴妃とクレオパトラ」の中に入つてゐる一文の中にありさうだが、それだけではなく、日本人としてあの当時の人々の胸には大陸や南国の姿が去来して、若い者の心の中に美しい夢を形成してゐた。田中氏の詩集の名前は一貫して大陸に縁故のある名が附けられたのも異とするに足らないし、先年日本浪漫派は創刊され、そして廃刊される運命を辿つたけれども、日本浪漫派に集つた人々は新文学を日本の国土の上に創造しようとして、當時の俊髦が同人として参劃したこと意義がある。「官僚と学校の先生は」といふやうな意味で同人とはならなかつた田中氏は、鬱勃たる心の屈曲をどうすることもならなかつたに違ひない。自分の属する「コギト」の同人は日本浪漫派に加盟して、そのとり残されたやうな寂しい心にも血を同じくするその運動には無関心ではゐられない。併し「大陸遠望」の詩集は文芸文化叢書の中の一巻として刊行され、文芸文化叢書の発刊目的は

#### 文芸文化叢書の発刊について

品か、非常に短い作品をかくが、短い作品の中にも、ドイツ的な重い思考を沈澱させてゐる。しかも、それを形象化するイメージは異様なさなどさと冷さとをもつてゐる。こうした彼の現実的な意識は多分に彼特有の歴史的知覚に負ふところのものだらうが、そうした精神活動の最も大規模に跳梁してゐるのは、長編「西康省」だらうだが、ここではもはや、一般的に抒情詩といはれる意味はうしなはれてゐる。」と述べて居られるが、一般的に抒情詩ではないといふ意味である。この一般的といふ言葉が持つ意義はなんであるのか、氏の形成する世界は一般的なといふやうなものから抜け出て、これらの諸編は毅然と高く聳えてゐる。これらは「四季派」と呼ばれる詩からも違つた風采を持つてゐる。それは日本の詩が持つ運命にも反逆してゐるからである。例へば日本の近代の詩には物語的な要素を含まないことが普通の常識である。物語的といふ言葉を抒情詩といふことに置換へると良く理解出来る。近代の日本の文芸文化の上には、恒にそれらの要素を拒否しつゞけて来た。例を挙げるならば絵画に於て見られる。日本画には物語を主題としたものがあるが、日本の西洋画にはそれはほとんどない。現代の人々に於ては全くないと言つてよいであらう。それ程にそれらから反抗して来たものはないであらうか。ここに現代の病源があるやうに思へる。その抒情・物語を支へるものは、言はば抒情とかいふ精神より、「ロマン」といふことを忘れ去つた結果ではないだらうか。「西康省」「大陸遠望」それらの詩集の題名も、また氏の姿勢を支へてゐる精神の表はれであるし、それらを失つてゐる現代に受け入れられない一斑にもなつてゐるのだと、私自身が理解してゐる。その理解の上に立つて氏の詩を鑑賞すると、如上の詩の理解もまたいく分かはなつとく

ひさしく、日本文学の優しくして高貴な精神や崇い倫理を心になつかしんでゐると、いつしか、この愛情の底から、私達には、新しい日本の宏遠な決意がよびさまされ、育まれてくるのを感じる。すると、これまで単に遠い過去と考へられてゐたものが、この決意の燈の中で、生ける伝統となつて燦然と輝き初めるのを観た。そこに私達は信頼すべき日本の血統を発見した。獻身の場所を見出したのを意識する。これは今日に於ける、日本の正しい體験ではないか。さう考へるならば、私達の生んだ此の一つの思想と雖も、現下の日本に存在の理由を確に持ち得ないものではない、と信ずる故に、敢へて私達は此の叢書の成立を企てた。日本を愛し、その芸文のこころをなつかしみ、うるはしい伝統を慕はれる方々の清鑒を希つてやまない。

昭和十四年十一月

日本文学の会

私は氏の詩の数多い中で最も特長とするものは、「詩集西康省」に收められてゐる、「虎」「多島海」「西康省」「登山道路」の諸編であり、それに続くものが「大陸遠望」の中の「詩人の生涯」「廣東の塔」「孝感の戦」等の諸編で、それを結ぶ精神の流れは同一で、同一のカテゴリーで以て解釈しなければならぬ。私が前に敢てこれに言及しなかつたのは、未だ私にそれを理解出来ぬものを含んでゐたからであるが、これを解明しなければ、氏の詩集に就て語ることも無意味となるか、または全貌を語るといつても、その謎の一半しか解き明すことしかない。併もこのことは、氏の大きな精神のよりどころを少しでもいふ心づもりで、不遜の筆を取る考へである。「現代詩人全集」第八巻に村野四郎氏は「非常に長い作

でき、日本の詩の上に特殊な地位を占めて居られることにも理解されるが、現代の日本の詩が、それを基調し開花しなかつたのは止むを得ないとしても、基調としなかつた故の病根は、将来の日本文芸史上の禍根を残してゐるものと思はれる。そのやうな「ロマン」の不足は、日本の文芸文化上に於ける欠除は、その性格である故に、小説家の詩集を持つてゐないのと好一対で、西洋の小説を書く人々とは大いに相違してゐるが、西洋を追従してゐる人々には皮肉の現象を示してゐて、西洋を模倣しながらもそれに徹し切れない故の矛盾が、日本の文化史上に於ける混乱を生じる原因を作る。これの原因は西洋には「ルネッサンス」はあつたけれども、日本にはそれはなかつたことにもあるだらうし、また西洋と日本との文化の成立の相違と、その「プロセス」に於ける特殊なものにも、指摘される原因を摘出されるが、日本的風土のもつ抜き難い特殊な成立は、西洋のそれとは大いに違つてゐる姿を持つ必然性が、ここに見られるけれども、それ故に日本的なもの以外を排撃したり、否定することとは、また日本の文化を狭くすることにもなるし、日本の古い文芸の上に、詩歌のなかに、「物語的」なものもなかつたであらうか。私は万葉の世界にはあつたし、また、古事記、日本書記等の物語を産んだ民族に、抒情詩がなかつたとは思はれない。現代の詩の歴史は短い、この短い歴史の上に於て、この精神は何故に圧殺されたのであらうか。ここに問題がある。田中氏の詩の理解されない原因はここにあると私は思つてゐる。併しそのやうな特殊な世界を切り開いた人として、日本の詩の上に特に記すべきで、この道を開くために努めた事実を、そしてその成果は、日本の詩史に特殊な影を投げ掛けてゐる。